

Title	ぷらっとシネマ 技術的稚拙と新しい危機 『プレシャス』（L・ダニエルズ監督）
Author(s)	萩原, 弘子
Editor(s)	
Citation	働く女性の情報誌 いこ る. 2010, 24 (2010 夏号). p.20
Issue Date	2010
URL	http://hdl.handle.net/10466/15474
Rights	



技術的稚拙と新しい危機

『プレシャス』(L・ダニエルズ監督)

1980年代後半のニューヨーク、ハーレムに暮らすプレシャスは読み書きも十分にできない16歳だ。学校についていけない生徒のためのフリースクールに行くようにと校長に言われて、渋々転校した。プレシャスの負う荷は重く、実は勉強どころではない。16歳の若さで2人目の子を身ごもっている。子の父はプレシャスの父だ。1人目の子どもも父の子で、ダウン症で生まれた。母メアリーは、家事全般を娘のプレシャスにさせて、自分は日ごなタバコを喫ってテレビの前で過ごす。プレシャスはまるで使用人だ。母からの怒号にいつも怯えている。デブで醜く、黒人で、貧乏で、父の子を産まされ、母に虐待されるプレシャスは、自分を未来のない無価値な人間だと思っている。

そんなプレシャスが、レイン先生と出会って学ぶ喜びを知るようになる。また、出産した病院の看護師ジョン、ソーシャル・ワーカーのワイズ夫人といった人々の温かさにも触れて、人を愛し、愛される喜びにめざめ、自信と夢をもつに至る。

『チョコレート』の製作者、リー・ダニエルズの初監督作品で、脚本、助演女優の2部門でオスカーを獲得した話題作だ。重いテーマにとりくんだ新進黒人監督を後押ししたい気持ちはあるが、映画としてあまりに稚拙で、また危険でもある。

まず指摘したいのは、映像作品としての技術的稚拙さだ。第1に、カメラワークの稚拙さ。めりはりのない映像がずるずると流れていく。筋立てについては記憶に残る場面があるが、視覚的映像として記憶に残る場面がない。これは、しっかりカメラ位置を定めて、カメラ・フレームに何を収めるかが計画されていないからだ。

第2に、脚本の稚拙さ。登場人物の成長や覚醒にあるはずのプロセスが書かれていないために、説得力がない。主人公のプレシャスは、レイン先生の指導のもと、書くことで自分の価値に覚醒していったらしいのだが、徹底した自己憎悪に沈んでいた彼女が、どんなふうを書くことの意味を知り、覚醒に至ったのかがまったくわからない。また、落ちこぼれ学校で最初はプレシャスに悪態をついていた級友たちが、出産した彼女を見舞うときには支えあう関係になっているのも唐突だ。そして本作最大の見せ場である、母メアリーの告白はどうだろう。自分の夫である男性による、娘プ

レシャスに対する性暴力についての重く哀しい告白だ。それはソーシャル・ワーカーのワイズ夫人に向けて突然なされる。家族である男の近親姦と幼児偏愛という暗い秘密をさらけ出すまでには、ワイズ夫人との信頼関係をつくるプロセスがあるはずだが、それは描かれていない。

第3に、人物の設定、キャスティングがステロタイプ的である点も問題だ。黒人のなかでも、レイン先生、ワイズ夫人、看護師ジョンといった、専門職に就いて有為な仕事をしている知的で美しく正しい人々のスキンカラーは薄い。その対極にあるプレシャスとメアリーのスキンカラーは黒い。また、メアリーは、レーガン大統領の時代によく黒人女性を指して言われた「福祉の女王」そのものに描かれている。不正な手段で福祉手当をとり、働く気がなく遊んで暮らす黒人女性が、アメリカ国家の財政を危機に陥れているという悪意のキャンペーンでさんざん言われたステロタイプだ。

人種的ステロタイプの打破は、スパイク・リー、ジョン・シングルトン、カール・フランクリンなど、ハリウッドで劇場映画をつくる黒人監督たちにとって常に大きな課題だ。彼らが黒人イメージについてさまざまな挑戦を重ねているのに対して、ダニエルズはただステロタイプをなぞっている。

アメリカの主要な新聞に出た映画評約200本のおおかたは絶賛で、批判的な評は1割弱と少なかった。「グロテスクなメロドラマだ」と批判する或る黒人評論家が、ニューヨーク映画祭で抱いた嫌な感じをこう表わしている——「白人観客に囲まれて見たとき、彼らが自分たちの優越を確認しながら、黒人への憐れみを抱いているのがわかった。その憐れみは、いつだって恐怖と嫌悪に転化することも私は感じていた」。

実はプレシャスの状況は、黒人憎悪に燃えるKKKのような人種主義者にとって、理想の逆ファンタジーだ——黒人はこんなふうにはダメであってほしい！

大統領に黒人を戴くようになって、人種的不安はすぐそこにある。本作に対する高い評価は、オバマ時代におけるアメリカ黒人の新しい危機を示しているのではないだろうか。

(アメリカ、2009年、109分)